

中国帰国者が生き証人 —わたしたちは二度と権力に騙されない

大塚栄子（2016年4月、2017年5月執筆）

わたしは中国帰国者です。母が「中国残留日本人婦人」。「子どもと法・21」の憲法学習会に参加しています。改憲が進みそうな深刻ないま、わたしは言いたい。だから子どもと法・21通信に投稿させていただきました。

■中国に生まれて

わたしは1963年に中国で生まれました。わたしが生まれてまもなく、「文革」が始まりました。幼児だったわたしはよく意味がわからなかったのですが、姉たちは「紅衛兵」として活動していましたがやめさせられました。なぜだろうか、と不思議でしたが、母が日本人だということを知ったのです。母は周恩来の「軍国主義の責任を負うのは権力者だけ、人民は被害者である」という言葉に救われたと何度も語り、「日本に帰れるまでは中国の恩に報いよう」と思って行動してきたと言っていました。しかし、三光作戦などにより日本軍に殺されまくった庶民はそうはいきませんでした。わたしたちは「小日本鬼」と言われ、文革時代は大変な思いで生活してきました。文革が終わった後の1978年にわたしは母に同伴して日本へ来ました。1972年に日中間で国交が正常化しましたが、日本政府は帰国のために何もしてくれず全部自力でしなければなりませんでした。

■母の永住帰国に伴い日本へ

成田についた途端、母が日本語をしゃべるのにびっくりしました。

帰国してから母はすぐに「なぜ自分が中国に置き去りされたのか、いまでも含めなぜ国は何もしてくれないのか」を探求し始めました。

国に騙されたのもわからず、あの悲惨な戦争にあい、終戦もわからず、国に放置されたのもわからず、3年もの間、裸状態で幽霊のように逃げ回り、走れた足も奪われ、血まみれな状態で、中国人に救われ、売られ買われ、日本に帰る方法もわからなかった母。言葉もわからない国で、と思うと悔しい思いでなりません。九死に一生得た命を中国政府の広い心に包まれ生き延びた。生き延びるため仕方なく、買われた家の五男（父）と結婚し、わたしたち兄妹五人は生まれたのです。

母は、日本に帰る方法を探し、やっとの思いで兄妹を見つけ、兄妹に手続きをしてもらい、1978年6月9日にわたしを連れて日本に帰ってきました。しかし、帰国後も日本政府は全く支援せず、母はアパートを探し、戦争によって奪われた足を引きずりながら清掃会社で仕事をしていました。

その2年後、父と姉夫婦と2人の子ども、兄2人が自費（国は出してくれない）で帰国した。6畳と4畳半で9人の生活が始まった。私は家計を助ける為、朝8時半から夕方5時半まで病院の中で仕事し、夜間高校に通い、毎日足がぱんぱんになり、家に帰っても休めるような場所もなかった状態だった。

母は 2001 年に全国に先駆けて「中国残留邦人国家賠償請求訴訟」をおこしました。わたしは日本に適応し、家族をささえるのに精一杯で、母がなぜここまでするのかわかりませんでした。

母のやってきたことが少しわかるようになったのは、母が死ぬ直前（2011 年 1 月に死亡）。特定秘密法制定で決定的にわかりました。「日本の国はまた戦争をするのでは」、そのための準備を着々と進めているのでは？

母は戦争というものを何よりも「悪」だと思っていました。それをけしかけるのが国であり、その準備を順々にするのも国でしょう。「自分たちはその国策に沿って中国に渡ってしまい、侵略者の一員になってしまった。『騙された』と言いたい結局自分の頭で考えず流れに身を任せてしまった結果。『満蒙開拓問題』とはこういう問題だ。「二度と再びこういう日本にはならない。そのためにわたしは活動している」。母の行動と言いたいことはこういうことだったと思います。

■戦争により生み出されたわたしたち

わたしたち「中国残留邦人」は戦争により生み出されました。

わたしの祖父母は四代続く青物問屋でした。しかし、お店の若者を次から次へと兵隊にとられ、しまいには片腕と頼んでいた番頭さんまで応召させられ、祖父母を追い詰めお国の為と命令され、抵抗もできず、仕方なく「満洲」に行かざるを得なかった。日本政府に“盛大に”「満洲」に送り出された。わけのわからぬまま家族と一緒にいざるを得なかった母は、医者になる希望も叶えられなかった。

しかも、母の親きょうだいの多くはその命を大陸でなくしました。わたしの祖父も 58 歳で、祖母は 53 歳で死に追いやられ「満洲」で死んだ。祖父母が死んだとき母は 14 歳。妹の面倒も見なければならなかった。どんなに大変だったのか？

そうして敗戦。日本政府は母たちを棄てた。

祖父母を追い詰め、祖父母を騙し、祖父母に命令し“人殺しに加担”させ、母を遺棄した日本政府をわたしは許さない。

母は、亡くなる一週間前から“逃避行”に戻ってしまいました。「早く逃げて、早く、早く〜…」と何度も叫んで息を引き取りました。無念でなりません。

■「お国のためとはなんなのだろう」

母の悔しい想いと怒り。今になって知りました。

「先の大戦の血と涙の受難史は世に消えるものではありません」。母の言葉です。

敗戦時、幼い子どもたちも含め次々と目の前で殺されていきました。血まみれの状態で幽霊のように逃げ回る人々、命令により生まれて来たばかりの我が子を自分の手で殺していく親、死体の山に潜る人々。沖縄も、広島、長崎も、そして空襲被害など日本国内の被害者、兵士として無残に殺された人々など日本人はいうに及ばず、中国や朝鮮半島など外国の人々に対してもこの侵略戦争は筆舌に尽くしがたい悲惨な被害をあたえました。こうした内外の数え切れない多くの人々の生命、そして血と涙と引き換えに得たもの—こうした方々から頂いたと言うべきかもしれ

ません—が、永久平和主義、基本的人権（権利・自由・平等・幸福追求）、主権在民を掲げる日本国憲法なのです。

■今も無責任な日本政府

日本政府の無責任によって生みだされたわたしたち。同じきょうだいにもかかわらず、同伴家族と呼び寄せ家族と分けられ、残留邦人一世の老後の面倒を見させるため同伴家族として日本に来させるが、なんの支援もせず、その一世が亡くなれば、まるでもう用がない。都営住宅から出て行け、です。30何年も日本に住んでいるのに在留期間更新を忘れたがため強制退去！生活保護受けているから在留を更新せず強制退去。一般外国人扱いで、日本政府は自分で作り出した歴史的背景も無視し、責任も取らない。

わたしたちに二つの国を持たせたのは誰だ、と問いたいとともに、わたしたちに二つ国籍ください。

2017年4月12日、残留邦人から、日本にいるきょうだいを見つけて欲しいという一本の電話がありました。日本政府に「無償のボランティアに任せず、責任を持って見つけてください」と言いたい。

■わたしたち中国帰国者は「生き証人」

中国大陸に置き去られた末にやっと帰国したわたしたちは、戦争の生き証人です。そして未だに差別や言葉の壁に苦しみ続けています。これが、先の大戦の真実だ。

2015年秋に強行採決した「戦争法」、そして9条の明文改憲を実行しようとしているいま、強く抗議します。

国民をバカにしたあの言葉、「国民はすぐに忘れるから」。安倍内閣の退陣まで闘います。「満州国」の指導者祖父岸と同じ道を歩ませない。安倍政権は、人を騙し、人を追い詰め、人を殺し、人をおびやかす政権です。国民を不安にさせる与党、暴走する与党、国民の声を聞かない与党はいらない！。

わたしたち国民は二度と権力に騙されない。

世界中の子どもたちを守るために。

「人を殺し、殺されるのが戦争」。絶対に許さない。

わたしたちは「戦争によって生まれ」「戦後処理で棄てられた」家族です。道標（みちしるべ）である日本国憲法を壊されてはたまりません。安倍政権の強硬姿勢と「改憲ありき」の姿勢に何としても抵抗しなければならない、それが当事者の責任だと思います。わたしは行動しています。